

# 大学院共通科目：保健医療福祉連携学特論

真柄彰

キーワード：保健医療福祉、連携学、特論、大学院、共通科目

Graduate school common master's program:  
health, welfare & medicine cooperation science

Akira Magara MD

Keyword : Health, Welfare & Medicine Cooperation Science, graduate school education

## I. はじめに

大学院共通科目保健医療福祉連携学特論を2年間開講した経緯と経過、今後の展望について述べる。

保健医療福祉分野における専門職の業務と社会での活動で、専門職間連携は重要である。専門職はその分野における広い知識の基盤の上に、自分の専門性をどう発揮するかを常に考えていなければならない。自分の専門分野に限った活動をしていると、それは患者あるいは対象者にとって限定的なサービスを提供するにしかすぎない可能性がある。一方、保健医療福祉分野の全体を見通した上で、自分の専門性を発揮することは、その有効性を大きく効果的にする。これを目指す意味で本学学部教育では「基礎ゼミⅡ」や「総合ゼミ」が行われている。同様の主旨から平成17年度より新設された本大学院修士課程の共通科目として「保健医療福祉連携学特論」は同時に開講された。

専門職連携についての社会で行なわれているレベルの講義と事例研究を行なうこと、保健医療福祉をひとつの連続した分野で、多数の専門職が実際実践している連携について、専門職同士が互いにその専門性を一層理解し、更に緊密な連携の可能性を知ることを目的に共通科目として、この連携学特論は新設された。開講前に、本科目を履修する多数の学生は社会人であること、勤務している場所は多様であること、経験年数は長短あることが予

想された。

本共通科目の内容

この講義はオムニバス討論方式であり、講師による一方通行の講義ではない。担当教員がコーディネーターとなり、司会もつとめる。教員は講義計画の段階で連携教育を指導するにふさわしい分野をあらかじめいくつか設定した。さらに当新潟と関わりのある地域で実際にチームリーダーとして活躍されている各分野の講師を選定し、主旨を説明して講義と討論の指導をお願いした。関連分野より専門の指定発言者の出席と助言をお願いできる回もあった。

初年度に依頼した講師と討論の主題は以下のようである。1)「乳児虐待；老人虐待」(岩崎浩三 新潟医療福祉大学、以下敬称略) 2)「クリティカルパスの現状と課題」(遠藤直人 新潟大学医学部) 3)「米国における保健医療福祉の連携」(Dr. David Satin ハーバード大学) 4)「健康のための保健・医療・福祉の連携」(薄田芳丸 信楽園病院) 5)「肥満と糖尿病の食事と運動」(上村伯人 上村医院) 6)「地域医療における保健・医療・福祉の連携」(吉嶺文俊 県立津川病院)

各講義ともまず地域連携活動の実際のリーダーから講義を受ける。その講師が提供する実際の症例によって3～4人の小グループに分かれてその連携演習をシミュレートして行いプレゼンテーションをおこなう。教員が

真柄彰 新潟医療福祉大学医療技術学部理学療法学科

[連絡先] 〒950-3198 新潟市島見町1398番地  
TEL : 025-257-4759  
E-mail : magara@nuhw.ac.jp

司会をしながら、そのケースを取り巻く保健的、医療的、福祉的問題点の抽出と解決法の提案を行いながら全員で討論をおこなう。これはさながら病院内で行われるケース会議や、介護保険場面でされる事例検討会のようなものである。それにより実際の現場で担当者個々人がどのように対象者を評価考察し、連携する各職種と互いに協力すればよいかを痛切に実感できる白熱した討論会となった。講師や参加した複数の教員もまたその一員として討論に参加した。最後には講師によって締めくくることが述べられた。

講義と討論による学習が進む中で教員は、意図的な提案をおこなった。学生はその多様な職種が偏らないように工夫して他職種からなるグループをつくる。保健医療福祉分野での多様な施設、病院で勤務している専門職相互の討論がおこなえることで、他専門領域の理解と自己の専門性を具体化することに役立つことを考慮した。学生が持ち寄った事例のなかから一例を決め、その事例研究を行い、連携をすればより良い結果がもたらされるはずの解決法を模索した。良好な連携ができた事例でも、望まれた結果が得られなかった事例でも、多数の専門職で検討して、いかにしたら良い連携ができるかを学びまとめることを目的とした。その結果を発表し更に討論する。最終回には全員参加の研究発表会をもうけた。連携による問題の解決方法を発表し合い、さらにその結果を社会に提案する目的で全記録を残した<sup>1)</sup>。

平成 17 年度に選ばれたテーマは以下のものであった。1) 「新潟における高齢者の長期入院医療の解決に向けての提言」(理学療法学分野・金子義弘ら) 2) 「要介護における家族の認識」(理学療法学分野・加藤めぐ美ら) 3) 「社会的入院者に対する専門職の関わり」(言語聴覚学分野・伊藤直亮ら) 4) 「地域社会における住民と専門職間の連携—どうすれば事件を未然に防ぐことができたのだろうか—」(保健医療福祉マネジメント学分野・田中秀和ら)

この授業科目が社会人学生において参考になり、あるいは学部新卒の学生でこの科目を選択した修士課程学生にとっては、現在先輩学生が、いかに連携を行なっているかということを知ることができた。また教員や各回の講師にとっても単に指導するというのではなく、共に考え反省し学ぶという結果になった。

平成 18 年度においても同様なコンセプトのもとで講義をすすめた。この時の講義テーマと講師名を記す。1) 「虐待」(岩崎浩三) 2) 「地域連携パスの実際と課題; 大腿骨頸部骨折」(遠藤直人) 3) 「在宅医療における専門職の連携」(萩荘則幸 らぼーる新潟、ゆきよクリニック) 4) 「地域包括支援センターと介護予防プラン」(西本円 新潟市地域包括支援センター) 5) 「肥満と糖尿病の食事と運動」(上村伯人) 6) 「地域医療における

保健・医療・福祉の連携」(園田恭一 新潟医療福祉大学)

前年度と同様に学生グループによる事例研究と発表討論会がおこなわれた。平成 18 年度に選ばれたテーマは以下のものであった。1) 「在宅医療と介護～自己決定を支える共通基盤としての連携～」(健康栄養学分野・長谷川ら) 2) 「若年性アルツハイマー病患者への支援～映画「明日の記憶」から～」(健康学分野・入山ら) 3) 「精神科病棟等における社会的入院の援助のあり方を考える—多職種における退院支援と退院後のサポートのあり方—」(保健医療福祉政策・計画・運営分野・山口ら) まとめ

リハビリテーション医療専門家の中で保健医療福祉の連携の重要性を知らないものはいない。私は 30 年来りリハビリテーション専門医としてリハ医療を実践して、保健医療福祉の連携はリハ医療の専売特許であり、当たり前のこととして取り立てて問題にするべき問題でもないと考えていた。ところが教員としての立場でこの講義に参加してみて、保健医療福祉の連携、ひいてはこれにとどまらないもっと広い意味での、どこにでもあるチームアプローチという方法が他の各分野においても学習すべき大切な事項であり、また自分たちの人生を楽しく過ごす上においても見過ごしてはならない部分であることに気づかされた。この楽しさをこの講義を受けることのできなかった他の学生にも知ってもらいたいものだと感じた。

平成 17 年度には、大学院設置記念講演として来学した、ハーバード大学で専門職間連携の講義を過去 20 年余に渡って行なわれている精神科医である David G.Satin 教授もこの講義に加わって頂くことが出来た。「連携」は、今後ますます保健医療福祉専門職において必要になると思われ、社会人学生のいろいろな意見は非常に貴重なものであり、新卒学生も学ぶところが多かった。このような事例報告は今後とも積み重ねていかなければならない。そして新潟地域のみならず、さらには全国における保健医療福祉の連携学が学問としても発展することに寄与することを願っている。

#### 参考文献

- 1) 高橋榮明編集, 新潟医療福祉大学大学院修士課程 共通科目 保健医療福祉連携学特論 講義資料・事例研究報告集, 新潟医療福祉大学, 2005, 2006